

厚真の虎毛 2部

僕のトラクマ

(1) リナミ、犬をほしがる

思えば5年前だった。リナミが保育園の年長組で僕が小学校の1年生だった。学校から帰るとリナミがお母さんに駄々をこねていた。

「ねえーいいでしょう？ 平蔵おじさんに子犬を見付けてもらっていいでしょう？」
そう言って犬を飼う許可を求めている。

「ねえー、お兄ちゃんもお願いしてよ。」

リナミは僕の方を見て言った。

お母さんはついにあきらめ顔で「そんなに言うならもう一度、お父さんをお願いしてごらん。」と言った。

何がきっかけでこうなったのか知らないけれど、去年の春あたりから急に犬が好きになり犬を飼って欲しいとねだるようになった。それはそれはしつこくお父さんやお母さんに頼み込んでいた。

お父さんもお母さんも犬好きでなかったし、それに公宅に住んでいたこともあって許可しなかったのだった。

「今の家では犬だけではなく猫もダメなの。」と言ってリナミの要求を拒否して来た。それでも物わがりの悪いリナミは「どうしてもダメなの？」と、繰り返し繰り返し訴え続けたのだった。

「公宅だからどうしてもダメ！」の一言でリナミはあきらめさせられてきたのだった。しかし、その時、お父さんは間違いなく言った。

「もし、家を建てたら犬を飼ってやっても良いよ。」

ところが、翌年の春、急きょ、家を建て新築の家に引っ越したのだった。

でも、お父さんもお母さんもあの時の言葉をとっくに忘れていたみたいだったけど、リナミはしっかり覚えていたのだった。

新しい家に引っ越した時、リナミが言った。

「公宅でないから犬を飼って良いでしょう？」

その時のお父さんとお母さんの慌てぶりはなかった。

「本当に自分で責任を持って飼えるのかな？ それが一番の問題だな。」

お父さんが言った。

いかにも認めたくないという感じがにじみ出ていた。

「責任もって飼うよ。」

リナミは言った。

僕たちが新しく住んだ家は平蔵おじさんの家から7～80mの所にあった。

平蔵おじさんの家には11匹の北海道犬がいた。

リナミは引っ越して以来、学校帰りに寄り道をして、犬1匹1匹に挨拶して回るようになっていた。

おじさんの話では犬たちはリナミの姿を見付けると「喜んで、喜んで」と言っていた。

実際、リナミを発見した犬たちは一斉に吠えだして体をくねらせ飛び上がり綱を何度もピーンとさせて大喜びした。

リナミが早く側に来てくれるようにと犬たちはねだった。そんな犬たちをリナミは時々、乱暴に扱って押しつけたり言うことを聞かない犬を蹴飛ばしたりもする事もあった。

そんな時、犬はすっかり這いつくばってリナミにゴマをすったり、腹を見せて服従する態度を示したりした。

一目見ただけでも怖そうな北海道犬にどうしてそんなことが平気で出来るのか、リナミに不思議な能力を感じたものだった。

お父さんが時々言う「見えない学力」の一つかなとも思ったりした。そんな毎日が続いて、秋が終わり雪がちらほら降るようになった頃、リナミが駆け込むようにして、帰って来るなり言った。

「おじさんの所の犬が子犬を生むんだって。おじさん 一匹くれるって言っていた。もらっても良いでしょう？」

お母さんはしばらく黙ってから「お父さんに聞いてご覧」と言った。

とうとう来るものが来たという感じだった。お父さんが仕事から帰って来た。リナミが二階から駆け下りてきた。

「お父さん、おじさんの所の犬が子供を生むんだって。公宅でないから飼っていいでしょう？」

お父さんはとっても困った顔をしてお母さんの方を見た。

「どうする？」

「仕方がないでしょう。ダメだって言う理由がないのだから。」

「そうか・・・。」

お父さんはちょっと考えてから「お前、本当に犬の面倒を見てやれるのか？」と言った。

「出来る。一生懸命面倒見る。」

リナミが言った。

「本当かな？」

「本当。頑張る。必ず世話をするから。犬を飼って！」

お父さんは沈黙して、しばらく考えていた。

「大丈夫かな？」ってまたお父さんが言った。

「本当に良いのか？」また、お母さんの方を見て言った。

「今までの経過があるのだから、仕方がないでしょう。」

「・・・仕方がないなあ・・・。」

ついにお父さんが言った。

お父さんがOKを出したのだ。ついに我が家で犬を飼うことになったのだと思った。僕も初体験だったから犬を飼うことがとても楽しみになった。

しかし、それから数日してリナミががっかりして帰ってきた。

「おじさんの犬、流産したんだって。」

そう言ってから「おじさん、別の犬を探してやるって。」と言った。

その時、リナミがそう言い終わるか終わらないうちにお父さんがすかさず言った。

「そこまでしてもらわなくてもいいよ。流産になったのだったら仕方がないよ。」

つれないお父さんの言葉だった。

リナミは黙って下を見ていた。

リナミがとっても悲しい顔をして外に遊びに行った後で、お父さんが言った。

「これで飼わなくてすみそうだね。」

とってもうれしそうに言った。

「そうね。」とお母さんも言った後で「でもちょっとかわいそうね。」とも言った。

「お父さん、お母さん、それはないんじゃない？」と僕は思った。

この問題はこれで終わりかと思っていた。それから10日ほどして犬を飼う話がぶり返されることになった。

リナミはいつもの日課で犬1匹1匹と挨拶を交わし、十分交流してから帰宅するのだが、その日、平蔵おじさんから話があったらしい。

家に着くなり言った。

「お母さん、平蔵おじさんの知っている人の家で子犬が生まれたんだって。おじさん、もらってやると言っていた。」

そして、一気に言った。

「その人からもらっていいでしょう？お父さんに聞かなければダメ？」

「んーん。お父さんはなんて言うかねえ。聞いてごらん。お父さんは、今日、帰りが遅いから話は明日にしてね。」

翌日、リナミはいつもより早く起きたみたいだった。そして何度もお父さんの側まで行ったけれど肝心な話が切り出せないでぐずぐずしていた。そうこうしているうちに朝食が始まった。

リナミは少し緊張した面持ちで、おそるおそる聞いた。

「平蔵おじさんの知っている人が隣の厚真町にいるんだけどね、その人の家で子犬が生まれたんだって。おじさん、その人からもらってくれるって言っていた。お父さん、子犬もらってもいいでしょう？」

リナミがそう言うか言わないうちに「ダメ！。ダメだよ。お父さんは、おじさんの所の犬だからもらっても良いつて思ったけれど、お父さんの知らない人からもらってまで飼う必要はないと思うよ。」と言った。

お父さんの厳しい口調のせいでその場がシーンとなってしまった。

リナミはご飯を食べようとして茶碗を持ち上げ口に当てようとしたところだった。お父さんの言葉が発せられた時、リナミの動きが一瞬にして止まった。

茶碗は口に当てたまま、箸はご飯にさしたまま、リナミは完全に固まってしまって動かない。まるで時間が止まったようだった。

そしてあっという間に、リナミの目に涙が浮かんできて、その涙が目いっぱい貯まり大きな塊となって眼球にくっついていた。

寒い朝、草花の先に朝露が水玉になって今にもこぼれ落ちそうになっているのと似ていた。

ほんのちょっとでも顔や手を動かすとぽろりとこぼれてしまいそうなのでリナミは必死にこらえていた。

手も顔も体のどの部分も絶対に動かしてはならないと懸命にこらえているようだった。

お父さんはご飯を口に運びながらリナミの方をちらっと見た。お父さんの顔が急に不愉快になり、段々怒ってきているのがわかった。お父さんがリナミを睨んだ。お父さんが怒っているときの顔だ。お父さんは完全に怒っている。その時、お父さんが急に大きな声を張り上げた。

「わかった！ 飼ってもいい！」

そう言って立ち上がった。

リナミは一瞬はっとした顔をして、ほんの少し微笑んで箸を動かした。

その時、リナミの両眼から大粒の涙がぽろりとご飯の上にこぼれた。

リナミは茶碗を口につけたまま顔を隠すように手早く箸を動かしてご飯を口に運んだ。

お父さんは怒った顔のままカバンをゆっくり持って「行ってくる。」とぶっきらぼうに言った。

「言ってらっしゃい。」

お母さんは玄関まで見送った。

リナミは箸を持ったまま腕で涙を拭いた。

「良かったね。」

お母さんが言った。

「しっかり世話をしてね。散歩も毎日だよ。」

「うん、わかってる」

リナミが言った。

お母さんは笑いながら「頼んだよ。」と言ったけど本当はあんまり当てにしていなくて、僕には思えた。

(2) リナミ、犬をもらいに行く

朝9時半ころ平蔵おじさんが来た。

「リナミちゃん、行くよー」

「おはようございます。今日はすみませんね。色々お世話になります。」

お母さんが言った。

「平蔵さん、申し訳ありませんね。リナミがわがまま言って。それと今日は私も一緒に

お願いします。先方の坂間さんにご挨拶をと思いますので。」

「ああ、そうですか、では、ご一緒しましょう。」

お父さんと平蔵おじさんが挨拶を交わしている。

リナミは夕べから大はしゃぎで、今朝は本当に落ち着かない様子だった。

朝の雪かきを手伝ったりもした。

「よろしくお願いします。」

目を針のように細くして笑顔いっぱいリナミが言った。

三が日が過ぎてからということで、1月10日の今日、子犬を受け取ることになったのだった。子犬が生まれて2か月がたった。

平蔵は初めて坂間宅を訪問したのは4年前の丁度この時期だったと思った。

幌姫はこの度も、トラ毛を2匹産んだ。オス、メス1匹づつだった。

7歳の出産だった。幌姫の出産は前回でお仕舞いと思っていたが、幸いにして今回もトラ毛がとれた。

いずれにしても、今回で本当の最後だと平蔵は思った。

これで幌姫は子犬を28匹生み、うち虎毛を18匹産んだことになる。しかし、このうちメスはわずかの7匹だった。どんな理由によるのかわからないが、虎毛のメスは少なく虎毛のうち約3分の1しかとれず、残りの3分の2はオスである。

虎毛のメス親が全て虎毛を生むとは限らないし、生まれた虎毛がいつも良質の虎毛とは限らない。実際、1匹の虎毛を生まずに終わった虎毛のメスもいた。

改良に必要な虎毛を得ることは、思いの外、困難さを伴っているのだ。

夕べからの雪がやんで今朝は晴れとなった。

青い空に積雲が二つ三つ、ぽかりぽかりと浮かんでいる。

今朝の気温はマイナス21度だった。

この辺りは北海道にしては比較的雪が少なく厳寒期はマイナス20度を超えるのが「当たり前」と言う地域でスケートが盛んな所だった。

雪はいつも軽くさらさらして春先のほんの一時期を除いていつもパウダースノーなのだ。

子犬のいる目的地は、冬道なので我が家から車で約50分の所にある。

だから坂間宅到着は10時半頃になるだろう。僕を含め4人が乗った車は厚真町の中心街に向かった。

道中はアイスバーンではなく、とっても走りやすいとお父さんは言った。

タイヤが雪にうまく組み込んでブレーキが良く効く状態なのだ。

スパイクタイヤが粉塵公害のため禁止されて新たに発明されたのがスタッドレスタイヤだったが、性能が予想以上に良く雪道でも不安なく運転できるようになった。

今日の道路も除雪作業がきれいにされているので轍（わだち）もなく、安心して坂間さん宅までの道のりを楽しんだ。

途中、道路の拡幅工事に出くわした。

お父さんと平蔵おじさんは「零下20度の中で大変だね。」などと話していた。

厚真町の中心街の信号を左に曲がって少しばかり進むと急に人家が少なくなってきた。道の両側には枯れたススキの穂が、次々、姿を現した。

黒ずんだ茶色の柏の葉が塊となっていくつも木にしがみついていた。曲がりくねった道々の崖は時折、雪の間から粘土質の肌を見せ1月初旬なのに春の兆しと錯覚させた。

この山間部でも米を作っているのだろう。稲穂の先が雪に埋まった田んぼの中にかくつか見える。

水口（みなぐち）に育った稲であろう。水口は水が冷たく稲が育ちにくい。そのため稲穂に実をつけるのが他の場所より遅くなり、刈り入れ時になっても実が入っていないこともある。そうした稲は刈り残されるのだった。

厳冬の中、雪をかぶり突っ立っている稲穂を見ながら、「稲にもそれぞれの一生がありますね」とお父さんは言った。

車が進むうちに20戸近くの集落が現れさらに進むと「ダムまで7km」との標識が道路沿いに立っていた。右手に常緑の松林があった。さらに直進するとオニキシベ林道と書いてある標識が出てきた。

「この先をちょっと行ったところで、右に曲がると坂間さんの家があります」

平蔵おじさんが言った。

間もなくして右に緩やかに曲がるカーブがあった。そのまま進むと広場のような空間があり正面に古い農家があった。

家の横にはナナカマドの木があり、てっぺんにはわずかに赤い実が残っていた。

7回かまどに入れても燃えない木だからこの名前が付いたと以前、おじいちゃんに教えてもらったことがあった。

車が坂間さんの家に着いた時、いかにも年を取った感じの犬が立ち止まったままこちらを見ていた。

その犬には虎のような縞模様があった。

「あれですよ。幌姫と言うのは。坂間さんの家では富と呼んでいますが。完全な虎毛です。」

平蔵おじさんは僕たち全員が車から降り終わるのを確かめてから「じゃー。」と言って坂間さん宅に僕たちを案内した。

中から坂間さんのおばさんが出てきた。

「おめでとうございます。今年もよろしくお願ひします。」

平蔵おじさんは新年の挨拶をしてから「先日、お話ししました塩岡さんです。」

平蔵おじさんはそう言うってお父さんを紹介した。

「塩岡です。この度は有り難うございます。」

「どうぞお上がり下さい。うちのお父さん、出かけていますが話はわかっておりますので。さー、どうぞ。」と言った。

僕たちは勧められるままに家に上がった。茶の間の中央には薪ストーブがあってその側に猫が1匹寝そべっていた。

その時、2匹の子犬がしっぽを振りながら僕たちの所に来た。

2匹ともトラ毛だった。

リナミは「ワーア 子犬だ！」と言って2匹とも捕まえてしまって右手と左手にそれぞれ抱いて「かわいい。かわいい。」と言っていた。

お父さんは坂間さんのお婆さんと平蔵おじさんの顔を代わる代わる見ながら言った。

「オスとメスだそうですね。出来ればオスを頂きたいのですが・・・」と少し遠慮がちに言った。

「いいですよ。山村さんから聞いておりましたから。」

話は簡単に付いた。

出されたお茶を飲みながら少し世間話をした。

「富の子供はこれが最後でしょうね。」

平蔵おじさんが言った。

坂間さんのお婆さんは「そうですね。」と言いながら「犬は好きかい？」と僕に聞いた。

「はい！」って答えたけど、リナミに比べて犬に対する反応がかなり悪い僕を見て、本当のところを見抜いているのかも知れないと思った。

いよいよ、オスの子犬をもらって帰る事になった。

坂間さんのお婆さんは車まで見送ってくれた。そして、僕たちが車に乗り込むまでの間、ずーっと、子犬の方を見ながら「かわいがってもらうんだよ。」と笑顔で言った。その時、目にうっすらと涙を浮かべていた。

平蔵おじさんは「ちょっと待っててね。」と言って幌姫のいる犬小屋の方に行った。しばらくして手に少し古めの藁（わら）をひと抱え持って車に戻って来た。

「母親の臭いの付いた藁だからね。今晚、子犬が泣かないようにね。お母さんの臭いを嗅がせて安心させるんだよ。」

平蔵おじさんはリナミに向かって言った。

子犬は、リナミにだっこされたまま、みんなで坂間さんのお婆さんにお別れをした。

帰り道、リナミは子犬を万歳状態でだっこしたり横に抱きかかえたりめっちゃめっちゃいじりまくっていた。

「リナミちゃん、良い名前をつけてね。」

平蔵おじさんが言った。

「もうつけた！」

「もうつけたのかい。」

「うん、トラクマにしたの。」

「トラクマ？ へー強そうな名前だね。トラクマか、いいね、いい名前だ。」

平蔵おじさんが言った。

僕もお父さんもトラクマと言う名前は初めて聞いた名前だけれど、平蔵おじさんが言うように良い名前だと思った。

「ところで血統書のことなんですが、トラクマは血統書を取れますか？」

お父さんが聞いた。

「大丈夫ですよ。もし希望であれば手続きをしますが。アイヌ犬は国の天然記念物ですからね。」

「ええ、知っています。そうなんですよね。それで・・・登録の方お願いしてもいいですか？ 登録料はいくらですか？」

「確か、3000円弱だったと思いますが、調べてあとで連絡します」

「何から何まで本当にお世話になります。」

今度は平蔵おじさんが言いにくそうに少し声を落として言った。

「トラクマが成犬になった時の話なんですけど、無料で種付けをさせて欲しいのです。虎毛を繁殖させていきたいのです。」

「ええ、もちろん、それは構いませんよ。」

「今までもそれぞれの方に無料でしてもらっておりましたので、・・・出来れば今回もと思ってお願いしているのです。」

「ええ、全く構いませんよ。そうして下さい。」

【何とか「厚真の虎毛」の絶滅を防いで繁殖させたいのです。】

「ええ。それはよくわかります。素晴らしい事だと思いますよ。そうした努力に本当に感心していますよ。」

「それともう一つお知らせしてきますが、今、もらってきた子犬の歯並びは正常ですから安心して下さい。」

「ああ、そうですか・・・？」

お父さんは、おじさんの言っていることに特別の意味があるのかどうか、よく理解できなかったみたいで、ちょっと不思議そうな顔をしながらそう返事をしていた。

その夜、トラクマが一匹になった寂しさから泣くのではないかと心配したが、時々、クンクン小声で泣くだけで、それ以上のこともなくその夜を無事乗り切った。

(3) 平蔵おじさんの「講義」

「リナミちゃん、いるかい？」

平蔵おじさんの声にリナミは飛び出していった。

平蔵おじさんが、トラクマの血統書を持ってきてくれたのだ。

リナミも僕もあまり意味がわからなかったけれどトラクマに関する大事な物が届いたと思ってうれしい気持ちになっていた。

お父さんもお母さんも、いかにも珍しいものでものぞき込むようにして血統書を眺めていた。

血統書は西洋紙よりほんの少しだけ大きめで下地が黄色で発行団体の略称が白抜きされたものだった。

平蔵おじさんはトラクマの登録のことや北海道犬について色々教えてくれた。

「血統書にはトラクマの両親と祖父母、曾祖父母、玄祖父母の四代までの名前が書かれています。」

そう言って話を続けた。

「トラクマの母親は幌姫と言って虎毛です。父親は熊雄と言って黒褐毛のアイヌ犬なんですけど、この犬の母方の祖父母がれっきとした虎毛なんです。こうした場合、経験上では

虎毛の子を産むことが多いのですよ。黒褐毛よりも虎毛の遺伝子が強いのでしょうかね。トラクマと一緒に生まれたもう一匹のメスも虎毛でしたしね。そんな意味でも母親の「幌姫」の発見とその後の繁殖がなければ、現在、「厚真の虎毛」は存在しなかったと思いますね。「幌姫」を最後に絶滅していたと思いますよ。」

「と言いますと・・・その幌姫は何処で見つけたのですか？」とお父さんが聞いた。

平蔵おじさんは大事な思い出を話す様に言った。

「丁度、4年前になります、戌年の時でしたね。偶然、新聞で「厚真の虎毛」の生存を知りましてね。その時、「厚真の虎毛」が一匹だけ生き残っていたのです。それが幌姫でした。メスなのでラッキーでしたね。その時から繁殖を始めたのです。今では六代までできました。幌姫はその後、矢鷹輝という黒褐毛のアイヌ犬との交配でやはり虎毛を取れましたし、綱芽衣城という赤虎のアイヌ犬との交配でも虎毛が作れました。これは黒虎でしたが。その孫も虎毛です。」

「成果が上がっているということですね。いやー、いいですね。ところで、黒虎とか赤虎とか言いましたね。普通の虎毛とは違うのですか？」

「ええ、一応区別して使うことがありますね。でも、どれも虎毛には違いないので一括して虎毛という場合が多いですね。ただ、黒色の毛と茶褐色の毛の混じり方の度合いによって3種類に分けることがあります。黒色の毛の量が茶褐色の毛の量よりも多いのを黒虎、反対に茶褐色の毛の量が多いものを赤虎と呼んでいます。両方の色が同じくらいの中虎毛とか中虎とか言います。単に虎毛という場合もありますが、話の前後関係で虎毛全般を言っているのか中虎のことを言っているのかを判断しますね。その外に白虎というのがあるのですよ。白地に黒の縞が入っているものです。」

「そうなんですか？虎毛もバラエティに富んでいるのですね。なるほど。わかりました。・・・で、北海道犬で一番多い毛色は何色ですか？」

「赤毛ですね。赤毛と虎毛以外の交配では半数以上は赤が出ますので、その関係でしょうね。ところが虎毛との交配では逆に虎毛の方が多く出るので。」

「へー、では虎毛の遺伝子は赤毛に対しても強いのですか？」

「そう言えると思いますね。でも、淡赤の場合は虎毛よりも多く淡赤が出ているんです。」

「そうすると虎毛が一番強いというわけではなさそうですね。」

「そういうことになりますね。実際に展覧会などに出品されたアイヌ犬の記録では、以前の本部展での記録ですが、赤毛は70% 白毛は21% 黒褐毛は5% それに、虎毛は2% 胡麻毛、灰色毛は各1%の順になっているのですよ。しかし、そうなっている原因を赤毛の遺伝子の強さだけのせいするわけにはいかない部分もありますね。つまりですね、その時代時代の所有者の好みとか犬への評価が反映しますからね。ですから、展覧会への出品が今後もずうっと赤が多いとは限りませんね。白の需要が高まれば、白が多く作られその結果として、展覧会への出品に白が多くなるということも実際あり得ますからね。最近はその傾向が強まっているような気がしますね。」

「なるほどね。確かに所有者の好みということはあるですね。当然、展覧会などには反映するでしょうね。ところで、今、虎毛は何匹くらいになっているのですか？」

「そうですね・・・全国で約80匹くらいになっているでしょうね。ただ、改良に使えるのは、20匹いるかどうかでしょうね。」

「ほうー、ずいぶん増えましたね。みんな厚真町の近辺にいるのですか？」

「いえ、色々な所に行ってますね。道内各地はもちろんですが、道外には、10カ所行ってますね。」

「エー？ 10カ所もですか？」

「ええ、そうです。近いところから言えばですね・・・青森、岩手、秋田、栃木、それに、千葉、神奈川、富山、それから・・・石川、福井、そして、山口県ですね」

「そんなに遠いところまで行っているのですか？」

「ええ、行ってますね。ほんの2, 3日前ですが、山口の方から虎毛が捕ったイノシシの肉が送られてきましたよ。」

「イノシシですか？」

「そうです、あちらでは、主にイノシシ狩りに虎毛を使っているのです。時々、ツキノワグマにも使っているようですが。厚真の虎毛はかなり活躍しているらしくてね、優秀な犬を送ってくれて有り難うって手紙には書いてありましたね。」

「へー、そうですか？すごいですね。ところでイノシシの肉ってどんな味ですか？北海道人はほとんど食べていないと思うんですけどね。」

「イヤ、豚とほとんど変わりませんよ。店で売ってる肉に比べれば少し、臭いが感じられるかも知れませんが、昔、農家で飼っていた豚と同じ味ですね。」

「それは、人工飼料を使わない餌の豚という意味ですか？」

「そうだと思いますね」

【いずれにしても、絶滅寸前まで行った「厚真の虎毛」が、北海道以外にも子孫が残されていっているなんて、すばらしいですね。表彰ものですよ。】

「いやー、それほどのこととは思いませんが、ただ、いま私の頭にあるのは、このアイヌ犬とあの虎毛と組み合わせてみてはどうかとか、どれとどれの組み合わせで交配させたらもっと良い虎毛が出来るのかななどと、そんなことをいろいろ考えていますよ。」

お父さんもお母さんもそして僕も平蔵おじさんの「厚真の虎毛」の繁殖にかける情熱に感心していた。

「あの一、愚問かも知れませんが、ふと、思ったのですが・・・」

お父さんは聞いた。

「つまりですね。血統書を考える時に先祖をたどって行くのはいいのですが、行き詰まってしまうませんか？人間だって家系の比較的はっきりしている人だって結局、元もとはよくわからないと思うのですよ。」

「その通りです。ですから祖犬というものを決めているのですよ。つまり血統のスタートとなった犬の名前をつけることがあります。例えば、千歳系を千歳阿久系とか千歳阿加一阿久系と言いますし、岩見沢系を岩見沢メリオ系とか言ったりしますね。阿加も阿久もメリオも、いずれもその系統の優秀な犬の名前ですが、現在いるアイヌ犬の先祖をたどっていけば、それらの優秀な犬にたどり着くことになっています。それ以前のことはわからなくともいいという事で扱っています。実際、祖犬の両親は不詳と記されているのですよ。ですから血統書をつないでいけば、祖犬に突き当たるということになると思いますね。」

「厚真の虎毛にも祖犬はいるのですか。」

「その点、必ずしもはっきりしているとは言い難い気もするのですがね。」

平蔵おじさんは少し困った顔をして言った。

「有名な虎毛としては明治30年頃には忠犬として有名なジッセンという犬がいたのですが・・・。」

「ジッセンですか？」

「ええ、犬にお金を払う人がいなかった時代に虎毛の子犬を10銭払って買ったという話からついた名前だそうです。このジッセンが熊猟に行った時の話なんですが、主人であるイサヌクテというアイヌ人の撃った弾丸が熊の急所をはずれてしましましてね、それで、手負いになった熊がイサヌクテを襲って殺してしまったのですよ。その時、ジッセンが主人を救うために猛然と熊に食いついて闘ったという話が伝わっておりますね。その一週間後、ジッセンは負った傷が原因で死んだそうです。」

「へー、それはすごい話ですね。犬が主人を救う話はよく聞く話ですけど、相手は熊ですからね。」

「ええ、ただ、当時は血統をしっかりと記録するという考えがありませんでしたからね。ジッセンのひ孫がピン子だということはわかっているのですが、それ以外は・・・」

「ピン子ですか？」

「ええ、大正天皇が皇太子だった時に献上されたアイヌ犬の名前なんですよ。」

「えー！そんなことがあったのですか？」

「ええ、あったのですよ。そのことがあって「厚真の虎毛」が一層有名になったんです。」

「へえー、そうなんですか。どんなきっかけで献上することになったのですか？」

「それはですね、何でも厚真町のトニカ、現在の富里という所ですが、その部落にいたアイヌの青年が行啓の皇太子の姿を見たいと思って出かけて行ったそうです。その時に一緒に連れて行った虎毛のアイヌ犬が目にとまったらしいのです。しばらくして使いの者が見えてその犬が欲しいということになったらしいのですよ。その犬の名前がピン子と言うのです」

「へえー」とお父さんもお母さんも、只、感心するばかりで何度も「へえー」を繰り返して言った。

「でも、その後のジッセンやピン子につながる虎毛の子孫はわかりません。それで今は、一応、昭和9年に展覧会で一席となり文部大臣賞を獲得した安康号が祖犬だということになっていますが、しかし、その後は、はっきりしないところがあります。中には血統書が事実と違うのではないかと思われるものも結構、出てきたりしましたから、私はその点に関しては自信が持てません。しかし、いま私が断言できるのは現在の虎毛の全てが幌姫の祖母に当たる富姫に行きあたると言うことです。その意味で現在は富姫を祖犬と考えて構わないと思っています。この犬は私も直に見て知っていますが実にすばらしい虎毛でしたね。」

「なるほど・・・そうですか。次々、質問して申し訳ないのですが。あの・・・別な質問をして良いですか？虎毛の繁殖や復活はわかるのですが、一方だけ虎毛で、他方が虎毛でない北海道犬との交配では段々純度が悪くなりませんか？」

お父さんは、長い間、疑問に思っていたことを口にした。

「ご意見はもつともです。でもそうではないのですね。いま私がやっているのは戻し交配というものなんです」

「戻し交配ですか？」

「つまりですね。純粋な虎毛に戻すための交配はアイヌ犬同士ですが、それぞれの犬種にはそれぞれの標準的な体型、規格があるのと同じようにアイヌ犬にもそれがあります。それはアイヌ犬の系統が違ってアイヌ犬としての共通した特徴を持っています。それと同時に「厚真の虎毛」独自のものがありますね。そうした一つ一つを意図的にねらった交配を繰り返すことで虎毛の純種の体型的特徴を取り戻していくことが出来るのですよ。体躯にしても耳にしても目の形にしてもそれぞれ典型的な特徴がありますので。もちろん、毛色も尾の巻き方についても同じです。このような考え方で他のアイヌ犬と交配させていけば純度は下がらず逆に上がっていくのです。」

「ははー・・・」お父さんはすっかり感心していた。

「うまくいかない事って多くあるんじゃないですか？」

「そりゃありますよ。いっぺんにはなかなかいきませんが、一つ一つかき集めるようにしていくんですね。丁度、虎毛をかぶった状態で虎毛の優れた特徴の一つ一つ体内に取り戻していくっていう感じに近いですね。戻し交配は、普通20年以上かかって90%くらいは純化されると言われていますけどね。」

「へえー、それはすごい取り組みですね。」

「もちろん、戻し交配は形態だけねらって行うわけではありません。つまり外見だけではない性質ですね。例えば敏捷性とか、穏やかな性質とか素直さとかですね。凶暴性があるなしも見えますね。そうした性質などを見ながら改良していくのです」

「なるほど。」

お父さんはただ感心するばかりであった。

「人間の場合もそうだと思うのですが、犬の場合も母親の影響を強く受けるのです。特に生後2か月間は母親の庇護のもとで生活するので性格、習慣の面で最も顕著に母親の特徴が現れます。臆病な母親からは臆病な子犬、凶暴な母親からは凶暴な子犬が育ちます。特に習慣は母親から学びますね。」

平蔵おじさんの説明の間、みんなは何も言わずに聞き入っていた。

しばらくしてお父さんがまた質問をした。

「戻し交配のことはよくわかりました。あの一、話を戻して恐縮なのですが、北海道犬の交配の際の色組み合わせで虎毛の出現率はどうなっているのですか？数字的にわかっていたら教えて下さい。虎毛は遺伝子が強いという話でしたし。」

「そうですね。学者の中に日本犬の体型と毛色についての研究をした人がおります。この方の研究によりますと、オス、メスの区別はつけていないのですが、赤と虎毛の交配の場合は虎毛の出現率が47%なんです。そしておもしろいことに、赤とゴマや赤と淡赤や白との交配でも、つまり、両親が虎毛でなくとも1%前後ですが虎毛が出ています。」

「それはおもしろいデータですね。それでは、赤と白とか、白と白からでも虎毛が出る可能性があるのですか？」

「白と白からはさすがに聞いたことはありませんが、赤と白からは虎毛は出ているようです。私の経験では、虎毛ではありませんが、赤と赤から白を取ったことがありましたね」

「それはまたなぜでしょうね？」

「それは、おそらく白の遺伝子を何処かの代で取り込んでいたんでしょうね。要するに

白の遺伝子を持っていたと言うことでしょうかね。」

そして続けて言った。

「逆に白と白から赤を取ったことすらありますよ。人間もそうだと思うのですが、何代も前から引き継いで来た表に出ない遺伝子をそれぞれ持っているのではないかと考えていますね。自分にとって好ましいもの好ましくないものも含めてですがね。」

「そうなんですか。それは人間も同じでしょうかね」と言った。

「赤毛以外の親と虎毛の親との間ではどうなんですか？」

「そうですね、これも同じ学者の報告なんですけど、虎毛と淡赤との間では虎毛は約29%出ているようです。実は虎毛と灰色毛に関するデータが極端に少なくて赤と淡赤のデータしか取れてないですね」

「そうなんですか。データがないのは虎毛の数が少ないせいでしょうか。」

「そうですね。もう一つは虎毛に特に焦点を当てていないということもありますね。虎毛に対する関心の低さでしょうかね。」

平蔵おじさんの講義は引き続き行われた。

その内容をかいつまんで言うとおおよそ次のようだった。

まず北海道犬には地域的な特徴があって千歳系とか阿寒系とか厚真系とか5つ、または6つに分類されること。例えば、阿寒系は白毛が多くて頭が大きいとか、平取系は黒や黒ごまの毛色が多いとか、それに千歳系は耳や目の形が良くて厚真系は虎毛が多いとかそれぞれ特徴があるそうだ。なぜそんな違いが起こったのか。それについて平蔵おじさんは「アイヌコタンの違いによる」と言うのだ。

北海道は昔、交通の便が極めて悪くそれぞれが袋小路になっていて陸の孤島だった。

そういう条件の中、それぞれのアイヌコタンで優れた猟犬の改良が進められた。

その違いが現在、地域的な特徴になっていると言っていた。

平蔵おじさんの話の中でお父さんが特に関心を示したのは、日高系の半分以上が絶滅した話。それに絶滅した渡島系の特徴に舌斑がないということだった。

「渡島系や日高系のことを考えると厚真の虎毛も危なかったですね。平蔵さんがいなかったら絶滅していたと思いますね。」

「多分そうになっていたと思いますね。」

「今ごろ幻の虎毛なんて言われていたでしょうかね。」

そうお父さんが言ったあと、改めて聞いた。

「あの一、先ほど渡島系には舌斑がないと言いましたね。」

「ええ、ありませんね。」

「北海道犬でも舌斑のない犬がいるのですか？」

「それがいるのですよ。確かにほとんどのアイヌ犬には舌斑はありますがね。学者の調査によりますと約9割だそうですよ。1割強にはないそうです。」

「そうなんですか。私は全ての北海道犬に舌斑があると思っておりました。」

(4) 北海道犬とアイヌ犬

ところで僕が気になっていたことをここではっきり説明しておきたいと思います。

お父さんは北海道犬と言うのに平蔵おじさんや美笛さんは、いや、それ以外にも多くの人がアイヌ犬と呼んでいる。

このことについて以前お父さんに聞いたことがあった。

お父さんの説明によると、アイヌ犬と言うのは徳川時代から明治時代に北海道にやってきた本州人が付けた名前だそうで「アイヌ人が飼っていた犬」という意味で使ったそうだ。特に畜犬商と言われた人達が本州に北海道犬を売るのにアイヌ犬と言った方が説明に都合が良いと考えたらしく、アイヌ犬の名前で売って歩いたものだからその名前が全国に広がったらしい。しかし、昭和12年にアイヌ犬と呼ばれた犬が天然記念物に指定されてから北海道犬と呼ばれるようになったそうだ。

秋田犬、甲斐犬、琉球犬などのように地域の名前がついたというわけだ。

しかし、北海道犬が正式名称となった今も、アイヌ犬と呼ばれているのは「アイヌ人が飼っていた犬」という意味の長い間の習慣に従って言う人が多くいるせいもあるけれど、中にはアイヌ人が長い時間をかけて改良して優れた猟犬に育ててきたというアイヌ人自身の誇りやアイヌ人に対する敬意というか、そんな気持ちでアイヌ犬と呼んでいる人もいるかも知れないという話だった。

と言うのは、北海道犬の保存に関わっている団体の中に、アイヌ犬という言葉が団体名につけているところがあるくらいだから、アイヌ犬の名前にこだわっている人達がいることも確かだろうね。と言っていた。しかし、反対にアイヌという言葉が差別語として使われた歴史があるためにアイヌ犬という言い方に抵抗を感じている人もいることは間違いないと思うけど、とも言っていた。

だけど、役所などでの文書、その他の正式な場所では法律に従って北海道犬と呼ばれるのが普通になっているそうだ。